ヤナギムシガレイの資源生態調査と管理手法開発事業

永峰文洋・伊藤欣吾・三浦太智

目 的

本県日本海で漁獲されているカレイ類の中で、平均単価が高くて漁獲金額も比較的多く、漁業経営に重要な位置を占めているヤナギムシガレイについて、資源の安定を目的として、漁業実態、成長、分布などを調べ、資源管理手法の開発などを行う。

材料と方法

- 1. 漁業実態調査
 - (1)漁獲統計調査

青森県日本海沿岸漁業協同組合の 2010、2011 年の漁獲状況を整理し、過去のデータとの比較を行った。新深浦町漁協本所と風合瀬漁協の小カレイの中に含まれるヤナギムシガレイの漁獲量を混入率から推定して追加した。

(2)漁場利用状況

沖合底びき網漁業について、漁獲成績報告書資料を整理し、ヤナギムシガレイの 1 操業当たりの漁 獲量等について過去のデータと比較した。

2. 生物特性の把握

年齢と成長、成熟過程などを把握するため、生物測定調査を行った。

(1)測定標本

2011年5月から2012年2月まで、沖合底びき網漁業(5、9月)分は深浦漁協から、刺網漁業(あまだい片側留刺網漁業:7、8月)分は新深浦町漁協岩崎支所および同支所沢辺事業所から、定置網漁業(底建網:12、1、2月)分については新深浦町漁協本所から、可能な限り銘柄別に標本を購入し、測定に供した。

(2) 測定項目

標本の、全長(TL)、標準体長(SL)、体重(BW)、内臓除去重量、生殖腺重量(GW)を計測し、生殖腺重量から生殖腺体指数(GSI=GW/BW×100)を求めた。また、生殖腺の観察により雌雄の判別を行ったほか、雌については成熟が進んだ1月~2月に生殖腺の成熟状態を観察に基づき記載した。年齢査定は、各個体から耳石を採取し、耳石横断面薄片観察により行った。年齢計算の基準日は1月1日とした。

3. 年齢別漁獲尾数の算出方法

年齢別漁獲尾数の計算は、底びき網漁業では1月~6月と9月~12月、刺網漁業では7月~8月、 定置網漁業では1月~8月と9月~12月の各期間別に行った。対象海域のデータは、調査対象漁協の データから引き伸ばし計算を行って求めた。計算期間は、2011年1月から12月までとした。

標本の測定結果から、各漁業種類別に銘柄別平均体重を求め、これから銘柄別漁獲尾数を算出した。 年齢査定結果から、各漁業種類別に銘柄別の年齢別雌雄比率を求めて銘柄別漁獲尾数に配分し、ヤナギムシガレイの銘柄別の年齢別漁獲尾数とした。

結果と考察

- 1. 漁業実態調査
 - (1)漁獲統計調查

青森県日本海海域におけるヤナギムシガレイの全漁獲量は表 1-1 に示すとおり、2001 年をピークに 16.9 トンから 29.3 トンの範囲で推移しており、ここ数年は 22 トン前後で大きな変化は見られなかったが、2011 年には 19.6 トンと 1998、1999 年のレベルまで減少した。

次に漁協・支所・事業所毎にみると、岩崎支所と沢辺事業所では 2011 年についても前年比 86%~87%と比較的多めの漁獲量となっていた。一方、他の主要水揚げ漁協である深浦、新深浦町漁協本所、鰺ヶ沢漁協では 2011 年の落ち込みは大きく、2010 年比 53%~73%にとどまった。

表1-1 ヤナギムシガレイの漁協別漁獲量

単位: k g

年/漁協名	大間越	岩崎 支所	沢辺 事業所	艫作 支所	深浦	風合瀬	新深浦町 本所	鰺ヶ沢	十三	総計
1997	不明	4, 512	1,019	30	1, 219	905	4, 747	14, 312	不明	26, 744
1998	不明	4, 547	1,015	44	1, 301	466	3, 067	9, 304	不明	19, 742
1999	不明	4, 769	1,065	17	1,890	168	1,651	7, 356	不明	16, 916
2000	不明	5, 862	1, 756	39	1,833	513	4, 394	9, 441	不明	23, 837
2001	不明	8, 346	2, 312	61	2, 418	319	3, 613	12, 262	不明	29, 332
2002	不明	5, 376	1, 468	16	3, 550	125	2, 762	14, 493	不明	27, 789
2003	不明	7, 317	1, 719	不明	5, 681	72	1,888	9, 259	不明	25, 936
2004	不明	9, 044	2, 124	不明	4, 451	56	3, 753	8, 263	不明	27, 691
2005	不明	6, 526	1,804	不明	5, 655	78	2, 773	6,067	不明	22, 903
2006	不明	4, 762	1, 481	不明	6, 830	69	2, 717	6, 698	不明	22, 556
2007	49	3, 560	1, 177	不明	6, 996	147	3, 272	6, 545	不明	21, 746
2008	114	4, 454	424	不明	7, 442	163	3, 907	7, 940	不明	24, 443
2009	26	5, 733	409	不明	6, 451	170	3, 611	6, 134	不明	22, 534
2010	89	9, 464	1, 563	不明	5, 755	280	3, 841	6, 223	不明	27, 215
2011	131	8, 191	1, 342	不明	3, 687	92	2,816	3, 319	0	19, 578
平均	82	6, 164	1, 378	_	4, 344	242	3, 254	8, 508	_	23, 931

漁獲金額については表 1-2 に示すとおり、2010 年には約 2,600 万円であったが、2011 年には 1,700 万円余と大きく落ち込んだ。

漁協・支所・事業所毎にみても、傾向は漁獲量の変化とほぼ同様となっているが、鰺ヶ沢漁協の減少は特に著しく、前年比33%となっていた。これは、前述のような漁獲量の減少に加えて、表1-3に示したように、単価が低下した影響も大きく受けている。

表1-2 ヤナギムシガレイの漁協別漁獲金額

単位:千円

年/漁協名	大間越	岩崎 支所	沢辺 事業所	艫作 支所	深浦	風合瀬	新深浦町 本所	鰺ヶ沢	十三	総計
1997	不明	13, 513	3, 150	59	2, 027	2, 338	9, 143	29, 993	不明	60, 223
1998	不明	12, 383	2, 901	77	2,031	1, 125	6, 404	18, 276	不明	43, 197
1999	不明	11, 926	2, 797	25	2,815	164	2, 895	11,628	不明	32, 250
2000	不明	13, 553	4, 299	57	3, 167	549	6, 918	16, 848	不明	45, 391
2001	不明	19, 593	5, 766	113	3,970	576	6, 944	20, 589	不明	57, 551
2002	不明	12, 894	3, 868	26	4, 757	143	4, 423	19, 624	不明	45, 735
2003	不明	13, 689	3, 436	不明	6, 337	57	2, 454	12, 103	不明	38, 075
2004	不明	15, 693	3, 607	不明	4, 967	46	4, 857	10,656	不明	39, 826
2005	不明	10, 688	2, 987	不明	6,845	98	4, 123	8, 782	不明	33, 523
2006	不明	7, 296	2, 159	不明	8, 685	46	3, 396	8,618	不明	30, 200
2007	50	5, 740	1, 964	不明	6, 883	158	3, 220	6, 995	不明	24, 960
2008	114	6, 314	560	不明	6, 492	82	3, 327	8, 152	不明	24, 926
2009	18	7,807	479	不明	5, 644	140	3, 228	6, 170	不明	23, 467
2010	56	9, 980	1,721	不明	4, 371	191	3, 321	8, 307	不明	25, 947
2011	110	8, 408	1, 352	不明	2, 964	54	2, 124	2,744	0	17, 755
平均	70	11, 298	2, 736	_	4, 797	384	4, 452	12,632	_	36, 202

1kg 当りの平均単価は、表 1-3 に示すように、全体では 2010 年から 1,000 円を割り込んで低下傾向をたどっており、1,000 円台を維持しているのは、あまだい片側留刺網漁業主体の岩崎支所と沢辺事業所のみとなった。

漁業種類別の漁獲量は表 2 に示すとおりで、2011 年の漁獲量は、刺網漁業と定置網漁業では経年変動の範囲内と判断されるが、底びき網漁業では 1997 年以降最も少なくなっており不振が際立っていた。

表1-3 ヤナギムシガレイの漁協別平均単価

単位:円/kg

	÷区・11/ V &									
年/漁協名	大間越	岩崎 支所	沢辺 事業所	艫作 支所	深浦	風合瀬	新深浦町 本所	鰺ヶ沢	十三	平均
1997	_	2, 995	3, 092	1, 987	1,663	2, 583	1, 926	2, 096	_	2, 252
1998	_	2, 724	2, 859	1,770	1, 562	2, 413	2, 088	1,964	_	2, 188
1999	_	2, 501	2, 627	1, 453	1, 489	975	1, 754	1, 581	_	1, 906
2000	_	2, 312	2, 448	1, 477	1,728	1,070	1, 574	1, 785	_	1, 904
2001	_	2, 348	2, 494	1,852	1,642	1,804	1, 922	1,679	_	1,962
2002	_	2, 398	2, 635	1,646	1, 340	1, 143	1,602	1, 354	_	1,646
2003	_	1,871	1, 999	_	1, 115	786	1, 300	1, 307	_	1, 468
2004	_	1, 735	1, 699	_	1, 116	822	1, 294	1, 290	_	1, 438
2005	_	1,638	1,656	_	1, 210	1, 251	1, 487	1, 447	_	1, 464
2006	_	1,532	1, 458	_	1, 272	670	1, 250	1, 287	_	1, 339
2007	1,018	1,612	1,668	_	984	1,076	984	1,069	_	1, 148
2008	1,002	1, 418	1, 322	_	872	503	852	1,027	_	1,020
2009	687	1, 362	1, 170	_	875	822	894	1,006	_	1,041
2010	628	1,054	1, 101	_	760	685	865	1,014	_	953
2011	841	1,027	1,007	_	804	583	754	827	200	907
平均	835	1,902	1, 949	_	1, 229	1, 146	1, 370	1, 382	_	1,509

表2 ヤナギムシガレイの漁業種類別漁獲量

単位:トン

漁業種類/年	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
底びき網漁業	13. 5	9.6	8.6	9.3	12.5	16.6	13.9	11. 1	10.0	11.9	12.0	12.6	11.3	10.8	6.0
刺網漁業	5.9	6.0	5. 7	6.3	9. 9	6. 7	9.5	11.8	9.3	7. 9	5. 2	5. 7	6. 2	11.1	9.4
定置網漁業	7.2	4.0	2.6	8.2	6. 9	4. 5	2.6	4.8	3.6	2.7	4.6	6. 1	5. 1	5.4	4.2
不明	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
総計	26. 7	19. 7	16. 9	23.8	29. 3	27.8	25.9	27. 7	22.9	22.6	21.7	24. 4	22.5	27.2	19.6

(3)漁場利用状況

1) 沖合底びき網漁業

沖合底びき網漁業の操業実態を表 3 に示した。2011 年の延操業回数は 5,548 回で、増加傾向となっていた 2007 年以降の水準を下まわって 2005 年と同程度であった。また、2011 年のヤナギムシガレイの漁獲量は 1 隻 1 日当り (8.5 kg) でみても 1 操業当り (1.0 kg) でみても前年比 60% 前後となっており、2011 年の漁獲量の減少は操業回数の減少のみでは説明できないことを示唆している。

表3 沖合底びき網漁業の操業実態(資料 漁獲成績報告書)

西 暦 年	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
操業隻数(隻)	5	4	4	4	4	4	4	4	4
延操業日数(日)	781	709	693	677	764	810	739	729	680
延操業回数(回)	5, 698	5, 407	5, 522	5, 757	6, 984	7, 303	6,822	6, 419	5, 548
1隻当り平均年間操業日数(日)	156	177	173	169	191	203	185	182	170
1日当りの平均操業回数(回)	7.3	7.6	8.0	8.5	9. 1	9. 0	9.2	8.8	8. 2
ヤナギムシガレイ漁獲量(kg)	13, 744	10, 893	9, 754	11,635	11,689	12, 256	11,005	10, 594	5, 752
1隻1日当りの漁獲量(kg)	17.6	15.4	14. 1	17.2	15. 3	15. 1	14. 9	14. 5	8. 5
1 操業当りの漁獲量(k g)	2.4	2.0	1.8	2.0	1.7	1. 7	1.6	1. 7	1.0

2. 生物特性の把握

(1)生殖腺体指数の変化と成熟度

雌雄の生殖腺体指数 (GSI) の推移を図1に示した。

雌の GSI は、12 月に上昇が認められ、1 月~2 月がピークとなっていた。雌の生殖腺の肉眼観察では、1 月に透明卵と産卵済みと判定される個体が出現しはじめ、2 月にはその出現数が増加して成熟の進行に伴う生殖腺の透明化の程度を大まかに区分することができた。これらの観察結果をまとめて各区分の GSI の平均値とともに表 4 に示した。区分 Π の個体は成熟進行中と推察されるが、図 2 に示した GSI のヒストグラムから、区分 Π の個体の GSI は 1 月から 2 月にかけて 10 以上で熟度の高い区分に移行している様子がうかがわれる。なお、表には示さないが 12 月には GSI 値が 10 を越える個体は 19 個体中 3 個体であった。

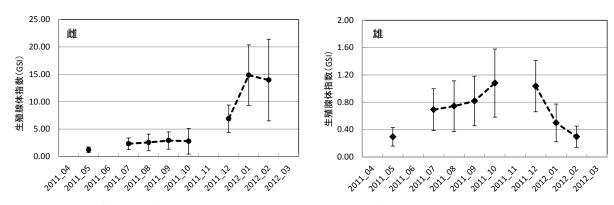


図1 生殖腺指数の推移(平均値±標準偏差, 雌の1月~2月の値は産卵済み個体を除外して計算)

表4 生殖腺観察状況とGSI平均値(2012年1月~2月、雌)

1月	GSI平均值	2月	GSI平均值	区分	成熟状態
未熟(-)		未熟(14)	0.5	I	未熟
透明卵無(78)	15.0	透明卵無(19)	16.2	П	成熟進行中
		透明卵少(46)	17.7	Ш	
透明卵有(3)	10.2	透明卵多(6)	9.7	${ m IV}$	成熟
		透明卵全体(3)	9.5	V	
産卵済み(13)	2.2	産卵済み(15)	1.8	VI	産卵済み

※()内数字は出現個体数

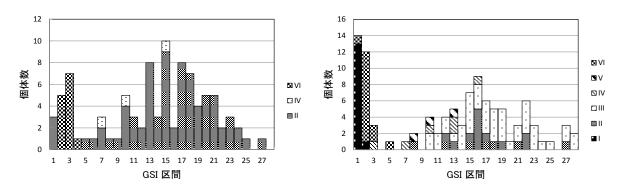


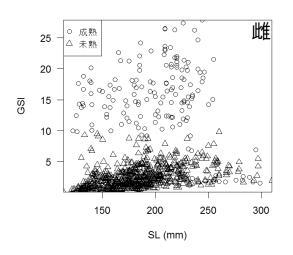
図 2 雌の GSIのヒストグラム (左: 2012 年 1 月、右: 2012 年 2 月、凡例は表 5 の成熟段階区分) GSI 区間は、GSI値の小数点以下を切り捨てた値(下境界値を含み、上境界値を含まない)

これらの結果と、常磐海域での雌の成熟判定基準とされている GSI 値 10¹¹を総合的に判断して、当海域での雌の区分Ⅱの個体の成熟判定基準を GSI 値 10以上とした。以上の成熟判定基準をまとめて、表 5に示した。また、SLと GSI 値の関係を成熟状態で区別して示すと、図 3 の散布図のとおりであった。この結果、雌の最小成熟個体の SL は 122mm であった。雄の GSI の変化は、図 1 に示したとおり 10 月から

表5 成熟判定基準(雌)

区分	成熟状態	成熟判定	基準		
I	未熟	未熟	GSI < 10		
П	成熟進行中-	未熟	GSI \ 10		
11)从:就连门中 -	成熟	GSI >= 10		
Ш					
IV	成熟	成熟	観察による		
V		NX XX	既宗による		
VI	産卵済み				
			•		

12 月をピークとする推移を示し、雌の推移と比較すると早期に極大値に達する傾向が見られた。雄の生殖腺の成熟状態の差異は肉眼観察では区別できなかったので、成熟判定基準としては雌と同様に常磐海域での判定基準として報告されている GSI 値 $0.5^{1)}$ を使用した。この結果、雄の最小成熟個体のSL は 117mm であった。



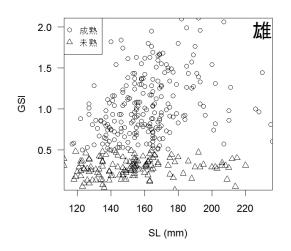
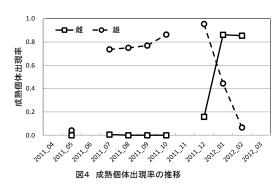


図 3 SLと GSI の散布図

以上の成熟判定基準に従って雌雄別に成熟個体出現率を計算し、その推移を図4に示した。雌の成熟個体出現率は、12月の0.15から1月の0.86まで急上昇し、2月にも0.85とほぼ同水準を保っていた。3月には標本が得られなかったが、表4の生殖腺観察結果から1月~2月が成熟のピークでこの後産卵の盛期を迎えたものと推察される。雄の成熟個体出現率は7月から12月にかけて0.73から0.96まで上



昇し、1月以降急速に低下した。雌の成熟個体出現率の年間推移と比較すると、雄では早期に極大値に達し、雌に比較して高い値が持続する期間が長い傾向となっていた。

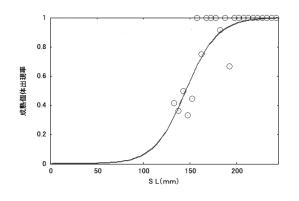
雌の1月~2月の標本について、SLを 5mm 毎に階級区分し、各階級の成熟個体出現率を求めて階級中央値に対して散布図を描くと図 5 (左)のプロットが得られた (SL245mm 以上は除外し、個体数 5以上の区分で作図)。このデータに Microsoft Excel のソルバーによる logistic 曲線のあてはめを行った結果、

[成熟個体出現率] = 1 / {1 + exp(-0.05909×([SL] -145.4))}

という回帰式を得た。この結果から、雌の 50%の個体が成熟する SL は 145mm と求められた。

雄の成熟個体出現率が 70%以上と高い値を保っていた 7月から 10月までと 12月の標本について、雌と同様に各階級の成熟個体出現率を求めて散布図を描くと図 5 (右)のプロットが得られた (個体数 5以上の階級)。このデータに雌と同様に Microsoft Excel のソルバーによる logistic 曲線のあてはめを行った結果、

[成熟個体出現率] = $1 / \{1 + \exp(-0.09890 \times ([SL] - 123.3))\}$ という回帰式を得た。この結果から、雄の 50%の個体が成熟する SL は 123mm と求められた。



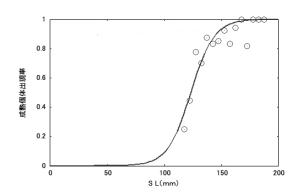


図 5 SL と成熟個体出現率の関係(左:雌 右:雄)

(2)標本魚の年齢組成

耳石縁辺部の透明帯および不透明帯の出現割合を図 6 に示した。雌雄とも夏場には不透明帯、5 月と 12 月~2 月には透明帯の出現割合が高かった。このことから、不透明帯は 6 月~10 月頃に形成されており、雄ではやや遅れる傾向があることがわかった。

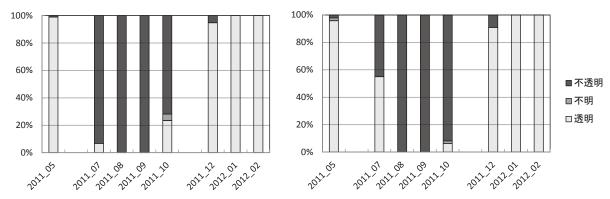
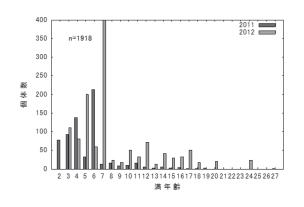


図6 耳石縁辺部の透明帯と不透明帯の出現割合の推移(左:雌 右:雄)

標本魚の年齢査定結果を図 7 に示した。標本中、年齢査定が可能だった個体は 2,623 個体(雌 1,918 個体、雄 705 個体)であった。最若齢の 2 歳魚は 8 月から出現し始めた (最少年齢は雌雄とも 2.6 歳)。最も多く出現した年級は、雌雄とも 6 歳(2011 年漁獲)および 7 歳(2012 年漁獲)の 2005 年生まれで、雌で 25%~42%、雄で 22%~40%(9 月のみ 8%)を占めていた。最高齢個体は雌 27 歳(SL 310mm、BW 292g)、雄 17 歳(SL 230mm、BW 147g)であった。雌 18 歳以上、雄 15 歳以上の個体は 3%前後となっていた。



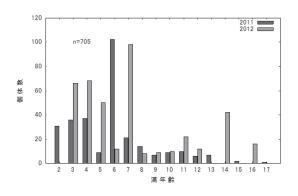


図 7 標本魚の年齢査定結果 (左:雌 右:雄)

(3)年齢と成長・成熟

雌雄別の年齢(Age)と SLとの関係を図 8 に、雌雄別の年齢と BWとの関係を図 9 に示した。これらの関係に R version 2.15.1 (The R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria) の Gary A. Nelson による fishmethods パッケージの growth コマンドを使用して von Bertalanffy の成長式をあてはめ、以下の成長式を得た。 [Age] は年齢(実年齢)。

雌: $SL = 305.0 \times (1-\exp(-0.1118) ([Age]-(-2.873)))$

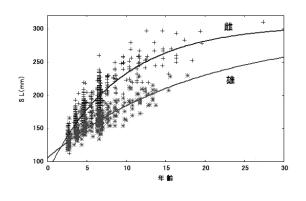
雄: $SL = 294.7 \times (1-\exp(-0.05379([Age]-(-8.269)))$

雌: $BW=335.4\times$ (1-exp (-0.1378 ([Age]-(-1.748))) 3

雄: $BW = 272.1 \times (1-\exp(-0.06328([Age]-(-7.215))))^{-3}$

なお、BWと SLには図 10 のような関係があり、回帰式は BW=6.61×10 $^{-6}$ ×SL^{3.122}であった(雌雄合算)。 雌について、1月~2月を合算して満年齢別の成熟個体出現率を計算すると図 11 のとおりで、

Microsoft Excel のソルバーによる logistic 曲線のあてはめを行った結果、 $[成熟率]=1/\{1+\exp(-1.2634\times([満年齢]-3.109))\}$ という回帰式を得た。このことから、3 歳魚でほぼ半数が、5 歳以上ではほぼ全数が成熟に達していることがわかった。雌の成熟段階と SLおよび年齢との関係をみると、図 12 のように高齢大型個体で成熟がより進んでいる傾向がみられた。雄についても雌と同様に 7 月~10 月および 12 月のデータをプロットすると、図 13 のようになり、2 歳で半数以上が成熟し、4 歳以上ではおおむね 80%以上の個体が成熟に達しているという結果であった。





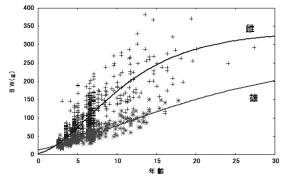
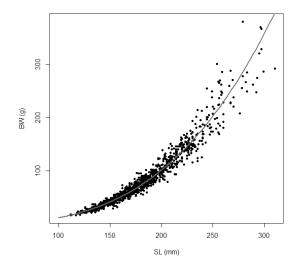


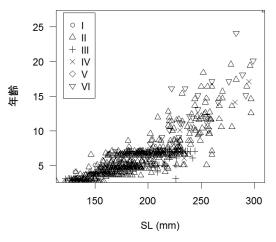
図 9 標本魚の年齢と BWの関係



0.8 開盟 0.6 經經 2 0.4 0.2 0 2 4 6 8 10 12 14 滿年齡

図 10 SL と BW の関係

図 11 雌の満年齢と成熟個体出現率の関係(1月~2月)



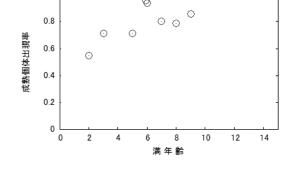


図 12 雌の成熟段階と SL および年齢との関係

図 13 雄の満年齢と成熟個体出現率の関係 (7月~10月、12月)

3. 年齢別漁獲尾数

青森県日本海海域における、2011年1月~12月までのヤナギムシガレイの漁業種類別年齢別漁獲尾数を表6に示した。年齢別では、6歳魚が全体の35.8%を占め、次いで4歳魚が18.9%、10歳以上の高齢魚も9.0%を占めていた(雌雄合算)。漁業種類別では、底曳網漁業・定置網漁業・刺網漁業による漁獲尾数の構成比率はそれぞれ29.6%・25.3%・45.1%となっていた(雌雄合算)。

年齢と雌雄の構成比率を漁業種類別に図 14 に示した。これによると、雌雄の比率に漁業種類によって差異がみられている。刺網漁業では 6 歳魚以下で雌の比率が約 80%以上と極端に高く、一方定置網漁業では雄の比率が最も高く、30%程度~70%程度の範囲となっていた。この点については、今後調査を継続して単年度に限らずみられる特徴であるかどうかを確認したい。

表6 青森県日本海海域におけるヤナギムシガレイの漁業種類別年齢別漁獲尾数(2011年)

	医曳網漁業				定置網漁業			刺網漁業			合計		
年齢	∂¹	우	計	₹	우	計	₹7	우	計	7	우	計	
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
2	1,916	4,073	5,989	1,565	2,391	3,957	1,105	3,976	5,081	4,586	10,440	15,027	
3	2,221	4,184	6,405	6,603	5,403	12,007	1,105	10,369	11,473	9,929	19,956	29,885	
4	2,944	8,345	11,290	3,159	6,165	9,325	663	22,061	22,723	6,767	36,571	43,338	
5	579	2,682	3,261	2,510	5,098	7,608	429	5,906	6,335	3,519	13,685	17,204	
6	8,162	14,487	22,649	4,096	11,645	15,741	3,778	39,862	43,641	16,037	65,995	82,031	
7	885	813	1,699	1,827	1,283	3,110	2,162	1,463	3,625	4,875	3,560	8,434	
8	423	1,349	1,772	1,886	1,438	3,324	1,961	2,061	4,022	4,269	4,849	9,118	
9	423	589	1,012	488	246	734	478	1,232	1,710	1,389	2,067	3,457	
10以上	4,994	8,843	13,837	673	1,387	2,061	2,458	2,299	4,757	8,125	12,529	20,655	
計	22,548	45,364	67,913	22,810	35,057	57,867	14,138	89,230	103,368	59,496	169,651	229,148	

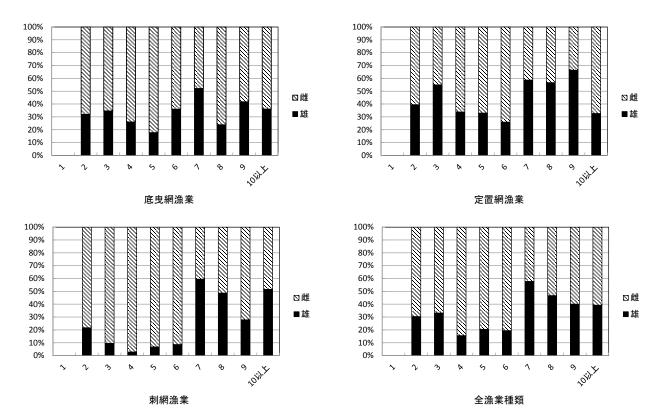


図 14 年齢別漁獲尾数の構成比率 (雌雄合算)

謝辞

漁獲実態関連資料の利用ならびに標本魚確保について、関係漁業協同組合のご理解と関係職員の方々の ご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

文 献

1) 高橋正和・二平 章・山廼邉昭文(2003) 常磐海域におけるヤナギムシガレイの資源生態と管理方策. 東北底魚研究, 23, 1 - 5.